説教余滴 2018 年 7 月 29 日、暑中、書を観る

7 月最後の主日となりました。
まこと、多事多難の文月でした。文披き月、など世も呼ぶようです。七夕祭の彦星、織姫が文を送り、それを読むことに因む、あるいはそれに因んで平安貴族たちが文のやり取りをしたことに基づく、等々諸説があり、決着はつきません。
初旬の豪雨災害に続いて真夏日、猛暑日の連続。青息吐息の状況を経験したことでした。

15 日の週は、かなり体調不良になり、朝起きて、午後になっても何も手につかない状態の日々でした。そうした中で、手にしたのが、『白寿・遊記山人の書』、岡崎恵子姉からお借りしたものです。立派な函入り、布装、印刷は大塚巧芸社（美術印刷で有名、さすが立派な出来栄え）。書道の第一人者の白寿記念出版、岡崎さんは「パラパラッとめくるだけで」と言われました。門外漢の私には何も分からないので、いたわりの言葉かけでした。
手にとって開いたところに書かれた文字にひきつけられました。
　『心正則筆正　　筆正則乃可法矣』柳公権
心正しければすなわち筆正しい、筆正しければすなわち法とすべきなり。
十二文字を二行に分かち書きして、実に見事です。平仄が合っている、と言いたい。しかしその意味も知らない。厳正に書かれ、しかも誇るところがなく、暖かい柔らかさを感じる。「威あって猛からず」を思い出しました。

あかあかと夜空を焦がし日につぎてまがねふきけむ八谷のたたら
　神まつる昔の手ぶりさながらに今も残れり里の田植に
　”遊記山人”こと宮田武義のふるさとは、古代からのたたらの里、比婆山伝説の地でもある。宮田さんは、東亜同人書院に学び、日本で最初の広東料理店・山水楼を日比谷に初め、多くの権門勢家、文人墨客に知られ、書家、歌人、篆刻など広い分野で名を残されました。教会員・鷲津スミコ姉のご尊父様。